

<研究ノート>

筑波学院大学オフ・キャンパス・プログラムにおける社会力コーディネーターの試み

西機 真*・武田 直樹**

The Role and Responsibilities of Tsukuba Gakuin
University Off Campus Coordinator

NISHIKI Makoto * and TAKEDA Naoki **

Abstract

平成17年度に、これまでの東京家政学院大学筑波女子大学から改組・改編した筑波学院大学では、「社会力ある人間を養成する」という教育目標を実現するために、「つくば市をキャンパスにする」という構想「オフ・キャンパス・プログラム (Off Campus Program)」に取り組んでいる。1年生から3年生まで、「社会力」をキーワードにした活動を行い、社会の一員として、よりよい「市民」として活動できる本当の力を身につけることを目的としている。学生が、大学の外に飛び出すことで、社会の仕組みを実感できると共に、幅広い人間関係を築くことができると考えている。

この教育目標を達成するために、学生が地域社会を活動フィールドとして様々な体験を通して学ぶ機会を設定する必要がある、つまりは「つくば市をキャンパスにする」ために、住民、市民活動団体、行政、教育研究機関、企業など、地域との連携が不可欠である。しかし、学内の教職員だけでは、こうした環境整備が十分にできないことから、「社会力コーディネーター」という身分で業務を行うスタッフを配置することとなった。

本稿では、社会力コーディネーターである筆者自身が、その取り組みを検証し、社会力コーディネーターのあり方、そしてオフ・キャンパス・プログラム (以後 OCP と略す) そのもののあり方について、今後の課題を明らかにすることを目的とする。

1 オフ・キャンパス・プログラムと社会力コーディネーター

下の通り述べられている。

筑波学院大学の平成18年度履修便覧では、教育目標と方針、そして OCP について、以

筑波学院大学を開学してから本学が掲げてきた教育目標は「社会力ある人間を育てること」「全ての学生を社会力豊かな人間に育てること」

* 筑波学院大学社会力コーディネーター、Tsukuba Gakuin University

** 筑波学院大学社会力コーディネーター、Tsukuba Gakuin University

です。「社会力ある人間」あるいは「社会力豊かな人間」とは、様々な人たちと仲良くし、いい関係をつくりながら、仕事や様々な活動を通して、自分から進んで「社会の一員」としての、「市民」としての義務と責任を当たり前のこととして果たすことを喜びにし生き甲斐にすることができる人間のことです。そのような人間になるためには、まず、人間が大好きな人間になること、誰からも好きになってもらえるような人間になることが大事なことは言うまでもありません。

すべての学生にそのような人間として成長してもらうためにはどんな教育をしたらいいか。考えた末に、特に重要なこととして打ち出した教育方針は、(1) 小規模な大学であることを最大限にいかした教育をする、(2) 学生一人ひとりの個性や能力を大事にした丁寧な教育をする、(3) 教室の中や大学の中だけでなく、つくば市全体をキャンパス(学びの場)にした教育をすること、などです。このような教育方針の中でも特に重要と考えているのが(3)です。

このような授業を本学では「OCP (Off Campus Program)」と名づけ(具体的には「実践科目A(キャリア実現基礎講座・社会参加基礎実習)」、「実践科目B(社会力強化実習1・社会力強化実習2)」、「実践科目C(市民実践活動)」)、大学の外に出て、様々な社会体験をすることを目的にしています。「社会力豊かな人間」として育つためには、できるだけ多くの市民と一緒に様々な活動を体験することが極めて大事なことだと考えているからです。

本学では、大学の中での講義や演習や実習の授業をしっかりとやると同時に、大学の外に出て、社会人であり市民である大人と一緒に企画したり、運営したり、活動したりする機会をできるだけ多くしますので、学生諸君は、そのような機会にもどんどん参加し、社会力豊かな人間になってほしいと思います。そして、卒業すると同時に、本学で学んだ知識や技術をいかし、国内・国外を問わず、社会の様々なところ

で活躍してほしいと思います。

この教育目標を達成するために、地域と大学、そして学生を繋ぐのが社会力コーディネーターである。次にその役割や位置づけ等を整理していくこととする。

1. 1 社会力コーディネーターの役割

前述した筑波学院大学の教育目標を達成させることが、他の教職員同様、社会力コーディネーターのミッションであり、その中で大きな役割として以下の3つが考えられる。

- ①大学の教育・経営理念に基づいて、学内外関係者と協力して教育環境の整備を行う
- ②学生の関心やニーズを把握し、それに応じた情報やアドバイスなどのサービスを提供し、OCPにおける学生の活動を総合的に支援する
- ③地域と連携して、学生、教職員が地域住民と協働することを通して、社会貢献的な役割を強化し、地域における大学の価値を高める

筑波学院大学として新たにスタートした平成17年度4月より、以下のような具体的な業務に取り組んできた。

- ・学生と社会参加活動のコーディネート
- ・コーディネートのための情報収集および提供
- ・市民活動団体、NPO、行政など外部協力者との連携
- ・クラス運営や課外活動など学校運営に関するアドバイス
- ・授業における講義やワークショップの実施

その中でも、OCPにおいて最も大きなウエイトを占める実践科目が、より効果的に、またより効率的に、成果を上げることが一番の使命であり、業務のほとんどの時間と労力をそのために費やしてきた。

1. 2 学内外における社会力コーディネーターの位置付け

筑波学院大学では、再スタート1年前に学長として着任し、「社会力」という言葉の生みの親でもある門脇厚司学長のリーダーシップのもと、OCPに関する枠組みや内容が検討されていた。そして、学内の教職員だけでは「社会力ある人間」を育てるという教育目標を達成することが不可能なため、前述したような社会力コーディネーターの役割を担う人材を必要としていた。そうした中、筑波大学発の地域スポーツNPOの設立と運営に携わっていた筆者の西機が、地域スポーツの活性化によるまちづくりについて門脇学長に協力を依頼したところ、逆に社会力コーディネーターの役どころを依頼されることとなり、平成17年4月から業務委託という形態で従事している。

学内外における社会力コーディネーターの位置付けは次の図1に示すとおりである。

学内においては、主に担任会議やOCP推進室と連携しながら、実践科目の内容や運営に関する検討および実践を行っている。OCPがスタートした時は、学長、事務局長、実践

科目担当教員とミーティングを重ね、大学の教育・経営理念を理解することから始まり、またキャンパスを観察しながら、学生や教職員との関係づくりをした。また、担任会議にオブザーバー的に参加し、社会力コーディネーターの役割や意義について整理し、取り組むべき業務を築くことから始まった。

そうした中、既にプログラムは動いており、取り組むべき課題や解決すべき問題が山積みであった。まず、教職員の教育・運営理念に対するズレや、新しい取り組みに対するモチベーション不足などから、学内に社会力コーディネーターの考えや意見に対する理解を求めることが非常に困難であった。社会力コーディネーターの存在意義について、学内での認識を高めなければ機能しないことがわかった。そこで、平成17年9月からオフ・キャンパス・プログラム推進室が立ち上がり、実践科目を中心に「つくば市をキャンパスにする」構想をプロジェクトチームとして建設的に推し進める体制ができた。

実践科目以外には、課外活動から地域にアプローチしたり、地域のイベントに参加したりすることを学生に促した。学生の関心のあ

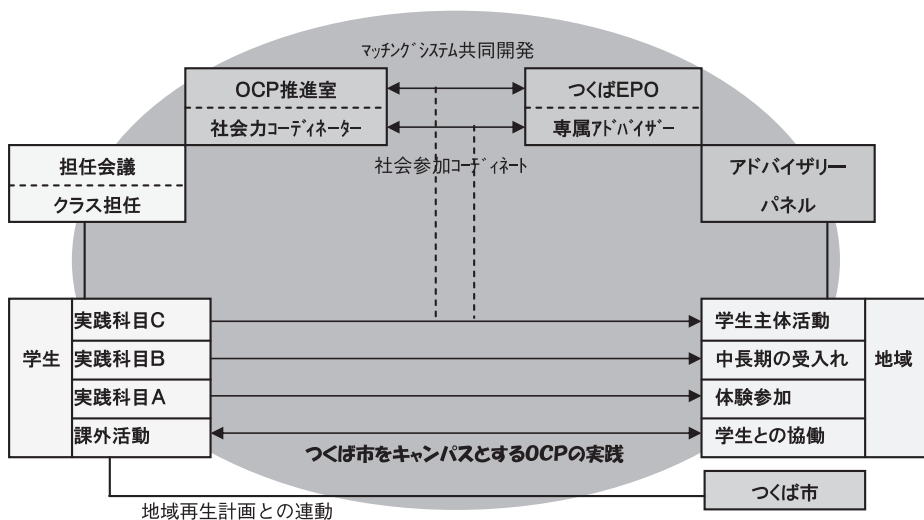


図1 OCPの構成 (平成18年度現代GP申請用紙から抜粋)

る分野と直結した地域との繋がりをつくることも大きな役割である。

一方、学外においては、まず平成17年5月に大学とつくば市が「筑波学院大学とつくば市との連携に関する協定」を締結したことで、地域における行政の取り組みに学生も参加できる体制が整った。機会があると学生への呼び掛けやつくば市関係者との調整などを行っている。

そして、OCPを成功させるために最も大きな役割を果たすのが市民活動団体である。学生の様々な関心やニーズを活かせる機会を設けるために、地域により多くの活動フィールドを整備する必要がある。そのために既に地域で活動をしている市民や団体にOCPを理解してもらい、協力してもらわなければならない。既に筆者が地域で活動していたこともあり、そのネットワークの活用から始まり、実際にイベントやプログラムに学生を送り込んで関係を築き、様々な情報源を通してさらにネットワークの充実を図った。

しかし、つくば市との連携や筆者の持つ市民活動団体のネットワークだけでは、全ての学生の活動フィールドを整備することは不可能である。そこで、つくば市における市民活動に対する中間支援団体設立の動きがあり、学長共々、NPO法人「つくば市民活動推進機構」(通称「つくばEPO」/平成17年10月設立・平成18年1月認証)の立ち上げに参画することとなった。門脇学長が代表理事、筆者は理事に就任し、連携協定を結び、学生が地域で様々な取り組みができるよう、市民活動団体情報の収集・提供や地域ネットワークの構築などに、協働して取り組んでいく体制をつくった。

2 社会参加活動のコーディネート

2.1 社会参加活動を通した学び

「社会力豊かな人間」を育てるためには、

教室や大学から飛び出して市民と協働することが不可欠である。実践科目では、全学生に社会参加活動を課している。

「大学ボランティアセンターガイド」(2005)¹⁾において長沼は、学生たちは活動を通して三つの学びがあると言っている。一つは他者との出会いであり、いろんな立場の人たちがいることを感じ、理解することである。特に、これまで同世代とほとんどの時間を過ごしてきた多くの学生にとって、社会での多様な出会いと交流は大きな影響をもたらす。もう一つは、社会と自分を結んでいく中で環境、人権、国際教育などの社会的な課題に気づく学びであり、実社会でそれらの課題に取り組むことで、大きな学習機会を得ることができる。三つ目は、自分の有り様とか、自分の生き方とか、社会の中に生きる自分であるとか、自分に跳ね返ってくるものを検証する営みが学びとなる、自己との出会いである。

このように、社会参加活動を通して、他者を知り、社会を知り、自分を知る、という三つの学びを支援するのが社会力コーディネーターの大きな任務である。

2.2 社会参加活動とボランティア

学生に「社会参加活動=ボランティア」という認識を与えないことが大切であると考えている。ボランティアの語源は、ラテン語の自由意志「voluntas」であり、英語圏では活動自体のことではなく、自発的に奉仕・労働する人のことを指す。したがって、動員・勧誘・強制などによる活動への参加は、本人の純粋な自由意思に基づかないので、厳密にはボランティアとは言えない。しかしながら、日本では奉仕活動の同義語、無償で労働する意味の表現としてボランティアが使われており、これは語源からすると明確な誤用だが、誤用のまま定着してしまっているのが事実である。

したがって、OCPでは、次の点から出来るだけボランティアという言葉を使わないことを心掛けている。一つは、学生の関心に見合った活動内容やフィールドを見つけようとするときに、一般的にボランティアと言われるものでは、範囲が狭く、本来自分のやってみたくないと繋がらないという認識を与えてしまう。もう一つは、大学の必修単位に認定された実践科目の取り組みであり、学生にとっては義務でもある。そうした中で活動に取り組む以上、ボランティアという言葉の意味から明らかに反するものである。

見方を変えると、社会での様々な活動に関心を持ちながらも実行に移すことができない学生や、これまで情報がなかっただけで情報を与えると関心を持って行動に移す学生も少なくなく、学生を後押しする、あるいは導くという意味合いで、社会参加活動を義務化することは非常に有意義なことであると考えられる。

2. 3 学生の関心やニーズの把握

学生が社会参加活動に取り組むにあたって、最も大切なのは、自主的・主体的な関心と魅力を感じることができかどうかということである。先にボランティアについて触れたように、実践科目における社会参加活動は、本人の純粋な自由意思に基づくとは言えない。しかし、学生本人が関心と魅力を感じなければ、活動を通じた学びを期待するのは難しい。よって、学生の関心やニーズにあった社会参加プログラムを提供することが重要であり、そのために学生の関心やニーズの把握は不可欠である。

学生に説明する際、学生の多くが認識しているいわゆるボランティアという考えを持たずに、広い範囲で自分の関心や興味から、社会参加活動に繋げてもらいたいと伝えている。まず、各学生にマインドマップを作成してもらい、関心・興味のあるテーマが、どの

ように社会と繋がるのかということを考えさせる。そこから、学生の情報ニーズを推測し、情報収集と提供に活かすようにしている。

2. 4 情報収集と提供

学生の関心やニーズを把握することと同時に、学生の活動フィールドとなる地域におけるイベントや市民活動団体の情報を収集する必要がある。ただし、それらの情報を提供する際、学生の関心やニーズの段階・状態によって必要な情報が異なってくる。

全国ボランティア活動振興センター(2005)¹⁾では、ボランティア活動における「情報ニーズの段階・状態」を以下のように整理している。

- ①ボランティア活動や大学ボランティアセンターに関心がない段階
(無関心・潜在的関心の状態)
- ②ボランティア活動に関心があるが、どのような内容や機会があるのかわからず、活動への漠然とした不安もある段階
(初期的関心の状態)
- ③ボランティア活動への知的関心があり、学習・研究テーマとして取り組んでみたいとする段階
(知的・学問的関心の状態)
- ④ボランティア活動・体験への明確な関心・希望があり、一定の領域での活動機会を得るための具体的情報を望んでいる段階
(具体的情報取得ニーズの状態)
- ⑤現在の活動の過程で困難や悩みがあり、相談・助言がほしい段階
(相談・助言ニーズの状態)
- ⑥すでに参加している活動を的確に評価したり充実させるために、より専門的な情報や幅広い関連情報を求めている段階
(専門情報・研鑽情報ニーズの状態)

さらに、「学生がこうした各ニーズの段階・

状態ごとに必要情報にスムーズにアクセスし、活用できるような、条件整備が求められる」としている。この1年半、学生への情報提供を行ってきたが、取り組みごとに段階に応じて以下の通り体系化できるであろう。

専門情報・研鑽情報ニーズの状態

⇒今後の実践科目 C や自主的な活動



相談・助言ニーズの状態

⇒実際に活動に取り組んだ学生への相談・助言



具体的情報取得ニーズの状態

⇒実践科目 B 受入団体リストの提供



知的・学問的関心の状態

⇒実践科目 B 説明会「活動団体によるプレゼン」



初期的関心の状態

⇒実践科目 A 社会参加活動リストの提供



無関心・潜在的関心の状態

⇒実践科目 A 説明会「社会参加とは？」

まず初年度は、「社会活動とは？」を考えさせる啓発プログラムを1年生前期最後の実践科目 A の授業で行った。1年生後期からは、実践科目 A において「体験型」「ふれあい型」の社会参加プログラムに取り組むため、活動日時や場所、内容などを記した社会参加プログラムリストを作成し学生に提供した。学生の活動フィールドとなる地域のイベントやプログラムにおける参加者やボランティア募集のプロモーション情報を、筆者が元々持っていたネットワークとウェブ上で収集した。実践科目 A で学生に紹介した活動は、別添の実践科目 A 社会参加活動プログラムリスト一覧(表1)に示した通りである

その後、実践科目 B では、つくば EPO に

表1 実践科目 A 社会参加活動プログラムリスト一覧 (平成17年度)

	プログラム名	運営団体
1	つくば・まちかど夜金ライブ	つくば・まちかど音楽市場ネットワーク
2	つくばスタイルフェスタ2005	つくばスタイルフェスタ実行委員会
3	TX カップフットサル大会 (土日祝)	TX カップ実行委員会
4	つくば科学フェスティバル	つくば市教育委員会
5	里山作業ボランティア (里山さわやか隊)	NPO 穴塚の自然と歴史の会
6	ガールズサッカーフェスティバル2005いばらき	茨城県サッカー協会
7	おひさまサンサンフェスティバル	つくば市障害福祉課/社会福祉協議会
8	つくば物語	つくば市観光物産課
9	筑波山麓自然学校	NPO つくば環境フォーラム
10	オオムラサキの棲む里山づくり	NPO つくば環境フォーラム
11	茨城県 NPO フォーラム	茨城 NPO センター・コモンズ
12	だがしや楽校に行こう	㈱カスミ わたしの企画
13	つくばFC フェスティバル&女子サッカー教室	NPO つくばFC
14	つくばスポーツ探検隊秋のフェスティバル	NPO アクティブつくば
15	つくば子育て応援フェスタ	つくば子育て応援フェスタ実行委員会
16	つくばマラソン	つくば市 ほか
17	全日本女子サッカー選手権	茨城サッカー協会
18	100本のクリスマスツリー	NPO つくばアーバンガーデニング
19	秋のスーパーマーケットツアー・収穫体験ツアー	㈱カスミ 秘書室環境・社会貢献
20	障害者スポーツボランティア	NPO アクティブつくば
21	おうち展	吉瀬ルネッサンス
22	世界一性格の悪い男「鈴木みのる」と登るユニバーサルマウンテン筑波	ユニバーサルマウンテン筑波の会
23	桜川ふるさとづくりプロジェクト	護美の会
24	遊ぼう広場の会 (ゴンダの丘)	つくば遊ぼう広場の会
25	つくば光の森	つくば光の森実行委員会
26	第2回チャリティー・クリスマスコンサート	つくば・まちかど音楽市場ネットワーク
27	第1回「つくば光の森」クリスマスイベントのストリートライブ	つくば・まちかど音楽市場ネットワーク
28	ロボカップジュニア茨城ノード大会県南地区講習&練習会	ロボカップジュニア茨城ノード運営委員会
29	しぜんっこくらぶ in ゆかりの森	NPO つくば環境フォーラム

協力いただき、中長期の受け入れに協力できる団体から情報を集めた。各団体の関係者を集めて、学生に直接団体を紹介してもらう合同説明会（33団体参加）を実施したり、情報整理用テンプレートに団体情報を記入してもらい学生に提示したりした。主に実践科目Bの受け入れ団体として、情報提供に協力いただいた団体、あるいは学生が自らアプローチして活動を行った団体は、別添の実践科目受

入れ協力団体リスト（表2）の通りである。

こうした一括した情報を段階的に提供する以外に、イベントやプログラム情報を更新して掲示する専用掲示板の設置、OCP推進室や説明会での窓口相談、メールでの情報配信、依頼のあったクラスでのプレゼンテーションなど、状況に応じた情報提供を行っている。

表2 実践科目受け入れ協力団体リスト（平成18年度）

平成18年11月現在

分野	団体名
医療・福祉	エイエスピー
	エンゼルハート
	市民のための健康医療ネットワーク
	ニッポン・アクティブライフ・クラブ茨城
	ほにゃら（ほにゃらキッズ）
	教材作成ボランティア
	ボランのひろば
	来夢ハウス
	ライフパートナーつくば
	つくばバリアフリー学習会
	茨城介助犬協会
	ケアサービスさざんか
	ウィラブ北茨城
	生活支援ネットワークこもれび
	たんぼぼ
	アニマルセラピー協会
	つくば市社会福祉協議会
	スイミーかるがも
	自然生クラブ
	栃木つぼみの会
環境	つくば肢体不自由児者父母の会
	みもり園
	グローバルキッズ
	盲導犬とユーザーをサポートする会
	つくば環境フォーラム
	茨塚の自然と歴史の会
	霞ヶ浦浄化連
	アサザ基金
	つくばリサイクルを推進する会
	わかものNPO - Voice Of Tsukuba
まちづくり	つくばアーバンガーデニング
	茨城の暮しと景観を考える会
	GIS総合研究所いばらき
	グリーンビュア
社会教育	小貝川プロジェクト21
	知の市庭
	子どもの研究所
	つくほクラブ（大穂公民館のびのびクラブ）
	すだち
	吾妻乳幼児学級
	遊ぼう広場の会
	ひたち親子劇場
	おもちゃライブラリーさくらんぼ
	こども工房バオバブ
	つくば市生涯学習課

分野	団体名
スポーツ	つくばフットボールクラブ
	Dance Association Seeds
	大竹サーフライフセービングクラブ
	アクティブつくば
	つくばオールスターチア
	セイラビリティ土浦
	茨城ゴールデンゴールズ
	茨城県ドッジボール協会
	ツクバリアンズ
	霞ヶ浦クラブ
国際	スポーツキングダム
	N & N コーポレーション
	JICA 筑波センター
	希望の学校
	タイ語勉強会
	日本語教授（つくば都市振興財団）
	アジア友情の会
女性	日本語クラス
	ままと〜ん
文化	モーハウス
	水戸オセロプロジェクトいばらき推進委員会
	つくばまちかど音楽市場
	吾妻まつり
情報・科学	あんな祭り
	まつりつくば
	県南生活者ネット
	コミュニティ龍ヶ崎
	ラジオフリークス
学内プロジェクト	東京国際大野球部 HP 作成（ウエルシステム）
	VSM プロジェクト（学内）
	日本科学教育学会（学内）
	ロボカップ（学内）
	パソコンボランティア（学内）
日本国際観光学会（学内）	

2. 5 コーディネート

全国ボランティア活動振興センター(2005)¹⁾では、コーディネーションの機能・役割を「活動に関する“援助ニーズ”と“活動ニーズ”とを橋渡しし、効果的に結びつけること」としている。また、コーディネートの標準的な手順について次の通り整理している。

- ①学生からの活動ニーズや相談を受ける
(活動ニーズの把握・登録)
- ②援助ニーズ(活動フィールド)情報の収集と提供
(援助ニーズの把握・告知)
- ③活動の選択・決定への相談・支援
(援助ニーズと活動ニーズのマッチング)
- ④活動の見守りと相談・援助
(活動中のフォロー、助言・介入・調整)
- ⑤活動の評価と継続への支援
(活動終了・継続のフォロー)

OCPにおける学生と社会参加活動のコーディネートも上記の手順とほぼ同様に行っている。学生が必修として取り組んでいる実践科目は、A・B・Cと必要とされる取り組みの内容が、次の図2のように高度になってくる。

また、活動期間の長短やテーマの深浅などによって、次のように整理することができる。

- 実践科目 A 「ふれあい型」「体験型」
- 実践科目 B 「中期間型」「一定タスク達成型」
- 実践科目 C 「実践型」「自己実現型」

こうした教育段階に応じて情報提供やコーディネートを行っている。学生の関心やニ

ズは潜在的なものから専門的なものがあったり、学生の性格や持っているスキルなどによって援助の仕方も変わってきたりする。また、活動フィールドや受け入れ団体について、必ずしも最初から情報やニーズが明確なわけではない。したがって、学生と受け入れ団体両方とコミュニケーションを取り、様々な状況を把握し、きめ細かなコーディネーションを行う必要がある。

2. 6 フォローアップ

社会参加活動を通した学びを支援することにおいて大切なのが、活動中と活動終了後のフォローである。実践科目では、学生はそれぞれの段階に応じて記録表やレポートの作成をする。それらを元に、クラス報告会で情報の共有を図ったり、担任がレポートを評価したり、また自ら活動の成果や課題などを振り返り確認したりする。社会力コーディネーターにとって、これらの情報を管理することは、学生のフォローアップ以外にも、団体からの疑問や苦情への対応や今後の活動プログラムづくりにおいて非常に大切なものである。

全国ボランティア活動振興センター(2005)では、フォローアップの意義と主な内容を次の通り示している。

- ①活動の主な経過や内容を整理・記録することで、学習成果を明記(銘記)しておく
- ②活動の成果や課題を報告し共有し合うことで、さらに新たな気づきや発見を得る
- ③活動体験を理論的・学術的視点から評価しまとめることで、研究力の向上につながる

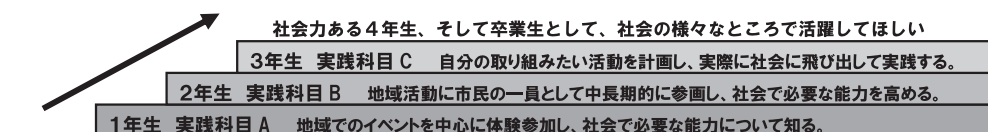


図 2

げる

④活動の課題や自らの実践課題を明らかにすることで、次の活動や研究につなげる

また、大学の教育活動の一環として明確に位置づけるからには、意図的なアプローチや教育評価のシステムは不可欠なものであるとしている。なお、こうした大学などの教育機関がボランティア活動を教育的なプログラムとして推進する取り組みである「サービスマーケティング」は、基礎となる概念が約100年前に米国において生まれた。現在では全米の950以上の大学が教育課程に取り入れ、膨大な量の調査研究の成果が蓄積されているとしている。

このように、社会力コーディネーターは、学生と地域を繋ぐ橋渡しの役割を担っているわけだが、地域のボランティアセンターと同じように、単に援助ニーズと活動ニーズを結びつけるだけではいけない。教育を資するためのコーディネーターであり、地域における学生たちの様々な学びの機会を支援する役目が社会力コーディネーターには求められる。

3 これからの OCP

筑波学院大学 OCP の取り組みは、「つくば市をキャンパスにした社会力育成教育」という名称で、文部科学省の平成18年度現代 GP に採択された。また、経済産業省も、大学において「社会人基礎力」を育成するよう要請した。こうした教育を実践していく重要性が高まっている中、大学において「社会力」を育てるといふ筑波学院大学の新しい試みを、さらに充実した取り組みにするために、次のような課題をクリアしていく必要がある。

3. 1 教職員の参画

教職員も、学生の活動を通して地域との結びつきを持ち、地域に求められる教育や教職員の資質を高めることが期待できる。実践科

目では、担任教員によって事前学習やフィードバックが実施されている。社会力コーディネーターも、実践科目のクラス運営をサポートしているが、社会力を育てるといふ教育を実践するだけのスキルを、担任教員が兼ね備えていないのが実情であり、そうした資質を高める対策が必要である。

また、大学の資源を活用したアカデミックな取り組みがなされることで、大学だからこそできる地域貢献に繋がりが、また学生が学問に取り組む動機付けにもなる。さらには、小さな大学にしかできない地域へのアプローチも重要になってくる。しかしながら、OCP はあくまでも学生の社会力を育てるためのものであり、大学の知名度を上げるためや専門的能力だけを高める内容に偏ってはいけない。

3. 2 学生の参画

学生の関心やニーズを反映させるために、できる限り学生の考えや意見を反映させることが大切になってくる。平成18年10月から、OCP 学生スタッフが編成され、学生の声を教育プログラムに反映させる体制をつくった。学生が主体的にプログラムを企画運営したり、地域のネットワークをつくったり、自分たちの取り組みを地域に伝えたりできる。より高度な活動に取り組んでみたいという欲求を満たすことができ、また学生のリーダーを育成することで、さらに高い社会力を育て、まさに「社会力豊かな人間」を育てることが可能になる。一方で、OCP に対して動機が見出せずにいる学生への配慮も検討していく必要がある。

3. 3 地域住民の参画

つくば市をキャンパスとして取り組んでいる OCP は、地域の方々の協力なくして成り立たない。大学の教育目標を達成するために、地域への協力を求めることは重要である

が、大学の欲求を満たすだけでは、地域と連携して充実した学習環境を整備することは難しい。今後は、地域からの提案やニーズを取り入れることができる体制づくりも重要である。

また、つくば市をキャンパスとして、学生が地域に飛び出すことも大切だが、様々な人間が大学キャンパスに足を運び、学生や教職員と交流し、活気ある、風通しのよい、雰囲気づくりも必要になってくるであろう。大学を地域のキャンパスにすることで、地域が積極的に大学の取り組みに対して協力したり、意見を言ったり、地域で取り組む教育へ発展することが期待できる。また、なかなか大学の外に踏み出せない学生や教職員が、学内にいても社会を知ることができる環境づくりにも繋がると考える。

これら三つの課題以外にも、こういった観点で学生、さらには OCP そのものを評価し見直していくのか、社会力を高めた学生をどのように社会に送り出していくのか、また様々な面でのリスクマネジメントなど、課題は山積みである。新しい試みはまだ始まったばかりであり、社会力コーディネーターとして、学生、大学、そして地域とともに、絶えず社会力を高めていくことに挑戦していきたい。

参考文献

- 1) 全国ボランティア活動振興センター (2005)
「大学ボランティアセンターガイド」全国ボランティア活動振興センター